

## 《高島秀樹教授の定年退職を記念して》



高島秀樹教授近影

## 師友回顧

——明星大学人文学部社会学科創設期の学生生活——

## 高島秀樹

明星大学人文学部人間社会学科では、教員が退職・逝去された際には本誌『明星大学社会学研究紀要』に、ご本人が辞退された場合を除いて現職教員からの送別の辞・年譜・著作目録を掲載し、惜別の気持を表すことを慣行としてきた。私も2016（平成28）年度をもって定年退職を迎えることとなり、同様の記事の掲載を学科から申し出ていただいたが、この内の送別の辞を辞退し、私自身による回顧に代えさせていた

だくことを申し出たところ、学科会議で快くご承認いただいた。当初は明星大学の一員として過ごした52年間の回顧を記すことを考えたが、あまりにも長くなりすぎることから、学部学生時代のことに限定することとした。これを記しておくことは、いささかでも明星大学・人間社会学科の歴史を振り返る手がかりとなるのではないかと考えてのことである。

1964（昭和39）年4月、学校法人明星学苑によって明星大学が理工学部1学部5学科（物理学科、化学科、機械工学科、電気工学科、土木工学科）をもって創設された。翌1965（昭和40）年に人文学部3学科（英語英文学科、社会学科、心理・教育学科）が増設され、私は人文学部社会学科第一期生の一員として入学、その時には思いもよらなかった52年間におよぶ明星大学での生活がスタートした。

高校3年生の時点では漠然としたものであったが将来の希望として、マス・コミ関係か教員を考えており、マス・コミ関係であれば学問領域としては社会学に属するという程度は理解していたし、教員については小学校教員として全科を担当することは無理でも中学校・高等学校の社会科であれば自分にも担当可能ではないかと考えたのが社会学科志望の動機である。大学に入学願書を受け取りに来た時か、提出に来た時か、窓口で社会学科に入学して中学校・高等学校の社会科教員免許を取得できるかお聞きしたのが唯一の質問であり、学科開設2年目から教職課程が開設されるとの回答をいただいたことを記憶している。入学試験は府中の学苑校舎で実施され、選考は2回の面接のみであり、第一次面接は複数の教員、確か3人の教員が担当されたが、入学後人文学部の学科主任の先生方であったと気がついた。第二次面接は兎玉九十学長の面接であった。

無事入学が認められ入学式を迎えたが、当時は体育館（5号館）も設置されておらず、1号館115階段教室での2回に分けての入学式であり、新入生数からか理工学部の1学科と人文学部3学科を合わせての入学式であったと記憶する。入学時には1号館のみが完成しており、建設工事の音が響くなかでの大学生活であったが、在学中に次々と校舎が建設される活気に満ちた雰囲気があり、1967（昭和42）年の6号館

（講義室のほか人文学部の学科室・教員研究室・実験室などが配置された）の完成時には学生仲間で学科教員の研究室の移転を行ったことが記憶に残っている。

当時の教育課程<sup>1)</sup>では1年時には一般教育科目のみが配当されていた。社会学科の専任教員としては学科主任である銅直勇教授（1964（昭和39）年度から着任されていた）と三好豊太郎教授の2名のみが就任しており、銅直教授が社会学科向けの一般教育科目「社会学」を担当され、他に一般教育科目「社会学」について人文学部向けは銅直教授、理工学部向けは三好教授が担当されていた。社会学理論・社会学史などをご専門とする銅直教授からは学年進行とともに「社会学概論」「社会学史概説」「社会学演習Ⅰ」を受講したが、銅直教授の社会学<sup>2)</sup>は私にとっては社会学を学ぶ出発点・基礎であった。そこで学んだ社会学・社会学理論、特に社会学の創始者A. コントの社会学理論・社会発展に関する3段階の法則などは今も記憶しているが、銅直教授はコントを常に「コムト」と表記されていたことも忘れられない。社会福祉学をご専門とする三好教授からは学年進行とともに「社会福祉概説」「社会学特論」（内容はイギリスにおける社会福祉発達史であった）「職業指導」などの講義を受講したが、そこで取りあげられたイギリス救貧法の考え方などは今も記憶している。そうした学習内容とは別に、「社会学演習Ⅱ」では『厚生白書』をテキストに、学生が班を作り担当部分について発表し、話し合うというゼミ形式の学習の仕方を学んだ。1年時に履修した科目は一般教育科目（3分野8科目）、外国語（英・独（独仏の中から選択）2か国語4科目）、保健体育科目（2科目）であったが、個性豊かな教員が多く、改めて大学の講義・授業、大学教授とはこういうものかという感じながらの毎日であった。小島威彦

教授の「哲学」、飯田晁三教授の「教育学」（私にとって教育学を初めて学ぶ機会となった）、上里朝臣教授の「史学」、栗原一男教授の「法学」、北岡勲講師の「政治学」、清水吉之助教授の「物理学」、網島定治教授の「地学」などの講義、百瀬甫教授らの「英語」、曾我英彦講師らの「ドイツ語」など記憶に残る科目・教員は数多い。「体育」では後期にシーズンコースとして三沢光男講師の指導のもと山形県蔵王でのスキー合宿にも参加した<sup>3)</sup>。児玉九十学長が直接学生に語りかけることを望んだと思われるが、一般教育のある科目の時間に講義に代わって学長が講義室に来て話すということもあった。

2年目には社会学科に専任教員として教育社会学・アジア社会研究をご専門とする福永安祥助教授、社会哲学をご専門とする山下淳志郎助教授が着任され、専門科目の受講が始まった。そんな中で神田神保町の古書店を歩くことも覚え、時期は明確に記憶していないが清水義弘氏（今も所蔵しているこの著書には「東京大学教授」と記載されている）の『教育社会学』<sup>4)</sup>という著書を入手した。教育社会学のきわめて簡明にまとめられた概論書・テキストと考えられる著書であるが、社会学の専門領域の中に教育社会学という部門があることを教えられ、教員志望の私にふさわしい研究領域であると思われる、これを専門にしようと考えようになっていった。

3年目には社会学科に専任教員として教育社会学・日本社会史・日本社会意識論をご専門とする桜井庄太郎教授、農村社会学・農業経済学をご専門とする伊藤章教授、現代社会論・大衆社会論をご専門とする中田重厚講師（前年度から嘱託助手として勤務していた）が着任され、さらに多様な専門科目の授業を受講することとなった。

学年進行とともに多くの科目を受講したが、

今でも記憶に残る科目が数多くある。3年時に桜井教授から「教育社会学」の講義を受けたことは今日の私の専門の出発点であり忘れることはできないが、後に桜井教授は戦後日本で開かれたIFEL（教育指導者講習会）の教育社会学部門を受講された日本の教育社会学研究・教育の第一世代であることを知った。教育社会学に加えて「社会史概説」「道德社会学」の講義の中で日本社会史、日本の社会意識について教えていただき、そこで学んだ「封建制度」「恩と義理」「晴と曇」「ポトラッチ」などの考え方は今も記憶している<sup>5)</sup>。4年時に伊藤教授から「都市農村社会学」を受講、これも今日の私の専門に深い関わりを持つ地域社会、特に農村地域社会や山村地域社会などに関する学習の出発点になった<sup>6)</sup>。社会的尺度の考え方、それに関連して日本の農村地域社会の本質が「習俗社会」ととらえられること、「生きかはり 死にかはりして 打つ田かな」（村上鬼城）という俳句を通して日本の農村地域社会の永続性について教えていただいたことなどを今も記憶している。山下助教授から2年時に「社会哲学概論」（必修）の講義を受講し、学年進行で3年時に「社会哲学特論」（選択）が開講されたので、この科目を履修しようと考えて第一日目に所定の講義室に行ったところ5名ほどしか受講生がおらず、それを見た山下助教授がゼミ形式にして下さり、M.WeberのDie Objektivität《Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis 1904<sup>7)</sup>》を読むことになった。2年時までに学習した私たちのドイツ語力でこれに取り組むことはかなり困難であり、岩波文庫から訳書も出版されていたが戦前に訳出・出版されたもので、その日本語も難解であった。4年時の「社会哲学演習」も同メンバーで履修しゼミを続けたが、2年間で星一つの岩波文庫の3分の2程度しか読了できなかった。進行状況が遅

いことを心配してくださったためか大学の長期休暇中は山下助教授の八王子市北野の当時のご自宅でゼミを開いていただいたことなど、忘れられない科目の一つである。2年時に福永助教授から受講した「社会調査法」を基礎として、3年時には「社会調査演習（必修、福永助教授・中田講師担当）」があり、日野市を対象地域としてテーマに従って班を作り調査することになったが、私は教育班に所属し福永助教授のご指導の下に同じ班の仲間と分担して市立小学校の保護者の訪問面接調査を実施、その中で潤徳小学校学区では百草園駅近くを分担したが、これが私の社会調査実践の最初の体験であり<sup>8)</sup>。福永助教授から社会調査に関して教えていただいたこと、そのご指導の下に社会調査の実施を体験したことは、その後教員として「社会調査法」「社会調査実習」「教育調査」などの科目を担当する出発点・基礎となった。「社会調査演習」の開始に合わせて有山崧市長に大学に来ていただき、日野市の概要について説明していただいたことも記憶に残っている。

学科所属ではないが、猪股英夫教授からは「社会思想史」「法律学概論」（教職課程・教科専門科目）を受講し、答案を高く評価していただいたことも忘れられない。他にも他学科所属の先生方、加藤義明講師（社会心理学）などや、教職課程担当の先生方、安倍三郎教授（教育心理学）、前之園幸一郎助教授（教育原理）などからも多くのご教示を得た。

さまざまな講義・演習・実習を通して学習を重ね、4年間の学習の総まとめになる卒業研究・卒業論文では在学中に後述する部活動で入っていた東京都西多摩郡五日市町（当時：現・あきる野市）小宮小学校の学区をフィールドに「地域社会の変動と教育—都下一山村における調査研究—」をテーマとし、福永助教授のご指導を受けた。自分としては桜井教授の教育社会

学で学習した内容、伊藤教授の都市農村社会学で学習した内容も取り入れたつもりで、特に伊藤教授から教えていただいた鈴木栄太郎の農村地域社会についての第一社会地区から第三社会地区という社会圏<sup>9)</sup>の考え方を対象地域社会の構造理解に取り入れたのは大いに工夫したつもりであった。1960年代後半の状況として、都心から距離のある都下の山村でも職業構造の変化、通勤雇用労働者化が生じてきており、それに対応して父母は子どもたちに少なくとも高校教育は受けさせたいと考えるようになってきているという学校教育に対する期待・意識の変化を実証的に明らかにしようとする研究であった。今から思えばきわめて素朴な、不十分な研究であったとしか言えないが、しかしその後50年、同じような領域で研究を続けてきており、問題関心というものは変わらないものだと今回あらためて思わされた。

学生時代の先生方について何よりも先に思い出されるのは、先生方と学生の関係がきわめて親密であったことである。何かにつけて先生方の研究室をお訪ねしてお教えいただいたり、お話ししたり、相談に乗っていただいたことはいうまでもなく、お正月には「お年始」と称して何人もの先生のご自宅に学生仲間でお伺いした。旧制成城高等学校の校長の経歴をお持ちで、成城に住まいされていた銅直教授宅では大学教授・学者・文化人の生活・お住まいとはこういうものかと強く感じたことを覚えている。今にして思えば先生やご家族には大変ご迷惑なことであつたらうが、どの先生もお断りにならずに受け入れていただいたことは大変ありがたいことであつたと今更ながらに思うことであり、良い思い出になっている。

学科の仲間とは一緒に勉強したり、時に遊びに出かけたりしたことを思い出す。定期試験の

時期になると電話でお互いの電話口のまえに講義ノート置いてああでもない、こうでもない」と話し合っただけで試験対策に取り組んだ（むろん現在のように“ライン”などはなかった）勉強仲間のことを思い出す。また、外国語の学習に熱心でアメリカン・スクールの英語学校に通うとともに、夏休みに仲間を募って英語の本を読む勉強会を開き、中田講師に指導をお願いした仲間がいたが、そこに私も参加させていただいた。社会調査実習では班は異なるものの報告作成<sup>10)</sup>と一緒に取り組んだ仲間（その中に自転車競技部で活躍していた仲間もいた）がいた。山下助教授の演習で一緒に勉強した仲間とは、山下助教授宅でのゼミの際は事前に北野駅のホームで予習してきた内容の情報交換をしたこともあった。大学祭に社会調査実習の成果を紹介することをテーマに参加し、夏休みから準備に取り組んだ仲間のことも思い出す。第一期生ということからか多様な仲間がいたことが特徴かもしれない。年齢もまちまちで、年齢が上の仲間も多く、姉妹で在籍する仲間もいた。社会人経験を持つ仲間、社会人として仕事を持ちながら学んでいた仲間もあり、駐留米軍関係の仕事をしており英語に堪能な仲間（後のアメリカンフットボール部の日米親善試合で通訳として活躍した）、中には演歌歌手という仲間もいた。大学創設当時は部活動が活発で、部活動で活躍する仲間も大勢おり、硬式庭球部（主将）・排球部（副将、主務）・弓道部和弓班（高校時代国体出場経歴を持つ仲間がいた）・弓道部洋弓班（当時アーチェリーは斬新な競技であった）・アメリカンフットボール部（後に在日米軍チームと日米親善試合を行った）・ハンドボール部・ワンダーフォーゲル部などの運動部、美術部・文学散歩部・ESS・軽音楽部・ギターマンドリンクラブなどの文化部と、さまざまな部・同好会に所属して活躍する仲間が多かったのは学科の

性格と関係があったのであろうか。海外に関心を持つ仲間もあり、ある女性の仲間は夏期休暇中にアメリカでホームステイを行い、それが記事として掲載された現地の新聞を見せてもらった記憶がある。仲間たちとは、むろん勉強とともにしただけではなく、休日などには一緒に出掛けたり、お互いの家を訪ねたり親しくしていたことが思い出される。

このように書いてくると学生時代は勉強をし、仲間と楽しく過ごしていただけのように見えるが、実際にはそれだけではなく、それ以外にも二つの活動に力を入れた。その一つが学友会活動であった。1年時の後半、1965（昭和40）年終わりごろから1966（昭和41）年初めにかけて2年生を中心に学友会を結成しようという動きが生じてきた<sup>11)</sup>。先輩や他学科の仲間と教わりながら、学友会の結成、その組織や規程などの原案を各学科・クラスで討議し承認することから何人かの仲間とともに携わった。学友会が成立した1966（昭和41）年度・2年時には、クラス代表委員、運営委員（体育部副部長）、大学祭実行委員、1967（昭和42）年度・3年時にはクラス代表委員、代表委員会議長、大学祭実行委員（体育大会担当）を務めた。仲間とアイデアを出し合い、何も無いところから組織や活動、行事を作り出していくことは貴重な経験であった。3年時の体育大会ではその年に東京で開催されたユニバーシアード大会<sup>12)</sup>に負けないものにと、ユニバーシアード東京大会実行委員であった成田式部助教授（体育、オリンピック東京大会実行委員も勤められた）のご指導をいただきながら企画などに工夫を凝らしたこと、さらにアメリカンフットボール部と在日米軍チームとの国立競技場における日米親善試合の運営に携わったことも思い出される。学友会活動を通して多くの先生方、仲間と出会っ

たが、教務部長近藤一二教授（当時は教務部の中に学生課があり、学友会も担当されていた）、学生課長小原格講師とのさまざまなやり取りは忘れることができない。アメリカンフットボール部の日米親善試合では大学側で担当された橋詰勇就職指導課主任・杉村征男用度課員とともに業務を進めた。学生では一学年上級となる初代運営委員長（化学科）や初代代表委員会議長（物理学科）、同学年や一学年下の多くの仲間と文字通り多種多様な業務を一緒に進めた。運営委員会・代表委員会・実行委員会など、誰と、どの年に、どの仕事を一緒に担当したかを記すときわめて多くなるので省略するが、学友会で活動をとにもするだけではなく、その中で仲間意識も生まれ、オフの時も一緒に過ごすことが多くあった。特に親しくしていた仲間運営委員会体育部とともに務めた部長（心理教育学科教育学専修）・部員（社会学科）がおり、それ以外に会計部長（土木工学科）、文化部長・文化祭実行委員長（電気工学科）、代表委員会副議長・書記（社会学科・英語英文学科など）など記憶に残る仲間が多い。その中の一人（機械工学科、体育大会の実行委員や代表委員会の議長団をとにも務めた）とは一緒に出掛けたり、彼が一人暮らしをしていたことから私の家によって食事をしていたり、彼の新潟県小出の実家に仲間とスキーに行ったり、特に親しくつきあっていた。学生の立場からは、学生の自主的な活動に対して大学側から規制が加えられると感じて反発することも多かったと記憶しているが、そんな中でも仲間と夜遅くまで活動して、学友会室に出前を届けてもらって一緒に夕食（？）を食べたり、帰りに安い食堂を探して食事をして帰ったりしたことは楽しかったこととして記憶している。3年時に代表委員会議長を務めた時の議長ぶりについては、一学年下であり現在明星大学教授を務めている者（心理・教

育学科）によれば、私の今の会議の進め方やそこでの発言・説明の仕方は当時と変わっていないといわれる。私自身は意識していないが、先の研究領域・研究テーマと同じように50年たっても変化しないのかと改めて思っている。

勉強以外に力を入れたもう一つの活動は、部活動、教育研究部での活動である。1年時のいつ頃であったか、先輩から将来教職をめざす学生として教科としての教育実習（当時は中学校・高等学校の教職課程では2週間であった）だけでは実践的な経験が不足するから、部を立ち上げて子供会などを実施して子供と接する機会を作り、経験を積む活動をしようと考えているが、参加しないかというお誘いをいただいた。明星大学創設1年目、2年目のころは新しい部が次々と生まれていたが、これもそうした動きの一つであり、飯田晁三教授に顧問をお願いして教育研究部として発足した。先輩には物理学科と化学科に属するお二人がおり、さまざまなご指導を得て、学ぶことが多かった。同級生も何人か加わったが途中入部や途中退部が多く、メンバーがあまり固定しなかったが、1年後輩からは多くの仲間を迎えることができた。創部2年目（私の2年時）には二人の先輩のご尽力により、廃校になった五日市町立小宮小学校養沢分校跡で泊まり込みの子供会が開催できるようになった。子供会を開催すること、小学生と接することは貴重な体験であり、勉強になったが、それとともに泊まり込みの生活、ミーティング、自炊、お互いのおしゃべりなども学生生活の一コマとして忘れることができない。当時合宿には顧問教員の同行が求められていたが、比較的高齢の飯田教授にはお願いしにくく、福永助教授にお願いしたところ快く承諾いただき、当時小学生であったお子さんを連れて来ていただいたことも忘れられない。部の仲間の

中から教育の道に進んだ者も多く出たが、私としては3年時に部長となったものの校友会活動との兼ね合いで全力投球できなかったことが心残りである。3年の夏休みの終わり、ユニバーシアード東京大会開会式（夕方からの開催であったと記憶する）と子供会合宿第一日目（子供会開催の前日・準備日）が重複してしまい、先に記した事情から開会式を見学に行き（行ったものの雨で順延になってしまったことは忘れられない）、千駄ヶ谷駅から五日市駅へ、そこから夜遅く一人で歩いて（終バスより遅かったのであろう）合宿先に向かったこともあった。

自分の過去については見方が甘くなるのは避けられないが、今の自分としては人並みに勉強もし、校友会活動もし、部活動もした充実した大学4年間であったと考えている。

このような学生生活を送って1969（昭和44）年3月24日、明星大学人文学部社会学科を卒業、4月1日から同学科助手補として勤務、翌1970（昭和45）年9月から児玉三夫副学長の命によ

り学校法人明星学苑がアラビア石油（株）から依頼されて運営するクェートとサウジ・アラビアの中立地帯に設置されているカフジ明星小学校に出向、2年間の海外生活・小学校教員という貴重な体験をさせていただいた。帰国後助手に昇任、勤務しながら認めていただいて明星大学大学院人文学研究科社会学専攻修士課程・博士課程に学び、1981（昭和56）年に明星大学人文学部社会学科講師に昇任したことを出発点に助教授、教授として教育指導・研究などにあたってきた。1990年代から仲間とともに明星大学の改革に取り組み、1996（平成8）年からの新生明星大学の誕生とその後の民主的な大学運営の確立にいささかの貢献をなしたと自らは評価している。その後も新生明星大学の一員として教育指導・研究・大学運営に努めて今日に至っている。この間のことを思い出すと記したいことは多々あるが、老人の昔話の長すぎることは歓迎されない、今回はここまでとしたい。

（2016年8月・記）

## 【注】

- 1) 高島秀樹「明星大学社会学科創設期における社会学教育」（『明星大学社会学研究紀要』第36号、2016年、所収）  
この論稿では「なお、この教育課程に従って履修した学生の学習実態などについても明らかにしたいと考えたが、紙数の制約からここでは取り上げることができなかった。この点については他日を期したい。」と付記したが、本稿はその意図も若干取り入れて作成した。
- 2) 高島秀樹「銅直勇教授の社会学」（1）～（4）（『明星大学社会学研究紀要』第20号～第23号、2000年～2003年、所収）
- 3) 高島秀樹「明星大学開設初期における保健・

- 体育教育」（『明星－明星大学明星教育センター研究紀要』第1号、2011年、所収）
- 4) 清水義弘「教育社会学」（1966年、東京大学出版会刊）
- 5) 高島秀樹「桜井庄太郎博士の『日本児童生活史』研究」（『明星大学社会学研究紀要』第17号、1997年、所収）／高島秀樹「桜井庄太郎博士の『日本青年史』研究」（『明星大学社会学研究紀要』第18号、1998年、所収）／高島秀樹「桜井庄太郎博士の教育社会学」（『明星大学社会学研究紀要』第19号、1999年、所収）
- 6) 高島秀樹「伊藤章博士の農村社会学」（1）～（2）（『明星大学社会学研究紀要』第14号～第15号、1994年～1995年、所収）

7) Max Weber Die 》Objektivität 《 Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis 1904 (富永祐治・立野保男訳『社会科学方法論』1936年、岩波文庫)

8) 高島秀樹「父兄の学歴と児童進学期待の関係」(『明星大学社会学科研究報告』第1集、1969年、所収)

潤徳小学校とともに第一小学校も対象とし、第一小学校の保護者に対しても分担して訪問面接調査を実施したが、この点に関してははっきりとした記憶が残っていない。

9) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』(鈴木栄太郎著作集版)1968年、未来社刊

10) 『明星大学社会学科研究報告』第1集、1969年、明星大学人文学部社会学科刊、所収「社会調査報告」

そこに収録されたのは次の各報告であった。福永安祥「都市研究の展望と基本的変数について」

石川 聡「人口動態調査一日野市における人口一」

田中恒善「日野市における農業の変遷」

高島秀樹「父兄の学歴と児童進学期待の関係」

11) 門脇正法作／森田信吾画『明星大学物語 「教育の明星大学」の誕生』2013年、明星大学刊

12) 第5回(1967年)夏期ユニバーシアード(東京大会)、1967(昭和42)年8月27日～9月4日にわたり、東京国立競技場等を中心に世界各国の学生が集まって開催された。陸上競技では沢木啓祐選手(順天堂大学)の5,000m、10,000mの優勝が記憶に残っている。

#### 【付記】

1. 教員の職位などは全て記載内容の時点でのものとした。当然その後昇任などがあるがそれを反映していないことをご了解いただきたい。また、学科名称・建物名称・組織名称なども全て記載内容の時点でのものとした。

2. できる限り資料の裏づけをとったが、資料による確認ができなかった部分もある。それらの点については記憶によって記載したが、50年前のことであり記憶があいまいで誤りのあることも懸念される。それらの点についてはご寛恕いただきたい。

(たかしま ひでき、本学科教授)



## 高島秀樹教授 略年譜

- 1947(昭和22)年3月 東京都生まれ
- 1965(昭和40)年4月 明星大学人文学部社会学科入学
- 1969(昭和44)年3月 同 卒業 (文学士)
- 1969(昭和44)年4月 明星大学人文学部社会学科助手補
- 1970(昭和45)年9月～
- 1972(昭和47)年8月 アラビア石油株式会社出向 (アラビア鉱業所カフジ明星小学校教諭)
- 1972(昭和47)年9月 明星大学人文学部社会学科助手
- 1973(昭和48)年4月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻修士課程入学
- 1975(昭和50)年3月 同 修了 (文学修士)
- 1976(昭和51)年4月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程入学
- 1979(昭和54)年3月 同 単位取得満期退学
- 1981(昭和56)年4月 明星大学人文学部社会学科専任講師
- 1986(昭和61)年4月 明星大学人文学部社会学科助教授
- 1991(平成3)年4月 明星大学人文学部社会学科教授 (現在に至る、途中学科名称「人間社会学科」に変更)
- 1996(平成8)年4月～
- 1999(平成11)年3月 明星大学人文学部社会学科主任
- 1999(平成11)年4月～
- 2001(平成13)年9月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻主任 (健康上の理由により任期中で退任)
- 2002(平成14)年4月～
- 2004(平成16)年3月 明星大学人文学部長補佐 (塚田紘一学部長)
- 2005(平成17)年10月～ 公益財団法人日本高等教育評価機構評価員 (現在に至る)
- 2006(平成18)年4月～
- 2010(平成22)年3月 明星大学大学院人文学研究科長
- 2007(平成19)年4月～
- 2012(平成24)年9月 放送大学客員教授
- 2010(平成22)年4月～
- 2013(平成25)年3月 明星大学明星教育センター長
- 2011(平成23)年4月～ 公益財団法人府中文化振興財団評議員 (現在に至る)
- 2013(平成25)年4月～
- 2014(平成26)年3月 明星大学副学長 (小川哲生学長)
- 2014(平成26)年4月～ 明星大学副学長 (大橋有弘学長、現在に至る)
- 2017(平成29)年3月 明星大学定年退職

この間、共立女子大学（一般教育「社会学」等担当）、駒澤大学（教職課程「教育社会学」等担当）、慶應義塾大学（教職課程「教育社会学」担当）、放送大学（「社会集団と子どもの社会化」担当）講師を務める。

学会所属 日本社会学会  
 日本教育社会学会  
 日本子ども社会学会  
 日本都市社会学会  
 関東社会学会  
 多摩学会

## 高島秀樹教授 著作目録

| 著書・論文名                                      | 発表年月           | 発表誌名・発行所等         |
|---|----------------|-------------------|
| 地域社会の変動と教育<br>—都下一山村における調査研究—               | 1968(平成43)年12月 | 卒業論文（未公刊）         |
| 父兄の学歴と児童進学期待の関係<br>—社会調査教育班調査から—            | 1969(昭和44)年3月  | 『明星大学社会学科研究報告』第1集 |
| N.S.ティマシェフ 社会学理論の研究（翻訳）                     | 1970(昭和45)年3月  | 『明星大学社会学科研究報告』第2集 |
| H.マウス 社会学の創始者、コントとスペンサー<br>—『社会学小史』第2章—（翻訳） | 1972(昭和47)年3月  | 『明星大学社会学科研究報告』第4集 |
| クエートの近代的教育について<br>—中東諸国における近代化と教育報告—        | 1973(昭和48)年3月  | 『明星大学社会学科研究報告』第5集 |
| サウディ・アラビアの近代化と教育<br>—近代的教育と政治・宗教の関連を中心として—  | 1974(昭和49)年3月  | 『明星大学社会学科研究報告』第6集 |
| 近代化と教育<br>—中東諸国の事例を中心として—                   | 1975(昭和50)年1月  | 修士論文（未公刊）         |
| 八王子市における教員・校長調査研究報告（1）～（5）                  |                |                   |

1975(昭和50)年11月～1976(昭和56)年3月

『めいせい』9巻8号～12号

## 現代教師の実態と意識

—八王子市教員・校長調査研究から—

1976(昭和51)年3月 『めいせい時報』第49号

## 東京周辺都市の教育構造と住民の教育意識(その2)

—教員・校長の社会的特性と教職意識—

1976(昭和51)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第12号

『峡谷型山村の産業振興と文教・生活環境の整備 —東京都西多摩郡奥多摩町—』(伊藤章・福永安祥と共著)

1978(昭和53)年3月 全国農業構造改善協会

『大規模宅地開発にともなう農業との調整に関する調査〔Ⅱ〕』(伊藤章らと共著)

1978(昭和53)年8月 宅地開発公団・全国農業構造改善協会

## 山村地域社会における学校

—学校の地域性と社会性を中心に—

1979(昭和54)年2月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第15号

## 福沢諭吉における「文明」概念の一考察

—日本における文明概念の先駆として—

1980(昭和55)年3月 『明星大学社会科学部研究報告』第12集

## 教員の社会的特性と教職意識

—東京都日野市における小・中学校教員調査研究—

1981(昭和56)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第17号

## 日本人の社会的形成と地域社会

1981(昭和56)年7月 福永安祥編著『現代アジア社会の研究』明星大学出版部刊、所収

## 学校運営をめぐる教員の意識

—東京都日野市における小・中学校教員調査研究(その2)—

1983(昭和58)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第19号

## M.ウエーバーにおける「支配」と教育

1984(昭和59)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第4号

## 『日本農村地域社会論』(講義ノート)

1985(昭和60)年5月 明星大学出版部

『教育社会学』(福永安祥と共著) 1986(昭和61)年3月 明星大学通信教育部

## 『社会踏査』における教育問題の実証的把握

—「教育調査の歴史」論考：その1、教育調査成立前史—

1986(昭和61)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第22号

## 大都市近郊地域における農業の変動過程

—大都市近郊農村地域社会の変動過程の研究(その1)—

- 1986(昭和61)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第6号  
 『千葉市の中学校教育 —『学校要覧』の統計的分析—』(福永安祥と共著)
- 1987(昭和62)年2月 明星大学教育社会学研究室  
 都市化と学校教育  
 —千葉市における中学校教育の分析—(福永安祥と共著)  
 1987(昭和62)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第23号  
 セツルメントにおける児童問題・教育問題の調査  
 —「教育調査の歴史」論考：その2、教育調査成立前史(2)—  
 1988(昭和63)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第24号  
 「生涯学習」概念の現段階と実践的課題(その1)  
 1989(平成1)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第25号  
 農家構成の変動過程と高齢者専業農家  
 —大都市近郊農村地域社会の変動過程の研究(その2)—  
 1989(平成1)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第9号  
 「生涯学習」概念の現段階と実践的課題(その2)  
 1990(平成2)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第26号  
 社会教育の現代的課題  
 —生涯学習概念の展開と具体化をめぐって—  
 社会教育実践の基本的な考え方  
 1990(平成2)年4月  
 福永安祥編著『現代社会教育論』明星大学出版部刊、所収、2章執筆  
 R.K.Mertonにおける社会調査と社会学理論  
 —「社会調査法」基礎研究ノート(1)—  
 1991(平成3)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第11号  
 É.Durkheimにおける教育の科学的認識  
 —「教育調査の歴史」論考：その3、教育調査成立前史(3)—  
 1991(平成3)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第27号  
 生涯学習のなかの職業と教育 1991(平成3)年7月  
 有本章・近藤大生編『現代の職業と教育 職業指導論』福村出版刊、所収  
 子どもの人権と学校 1991(平成3)年11月 『めいせい』1991年12月号  
 大都市近郊山村の変動過程：模範村戸倉村の80年(1)  
 —大都市近郊農村地域社会の変動過程の研究(その3)—  
 1992(平成4)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第12号  
 現代日本の青年と教育 1992(平成4)年11月 『めいせい』1992年12月号  
 大都市近郊山村の変動過程：模範村戸倉村の80年(2)  
 —大都市近郊農村地域社会の変動過程の研究(その4)—  
 1993(平成5)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第13号

## 『日本の農村地域社会 — 原型・変動・現状—』

1993(平成5)年4月 明星大学出版部

## 教育と職業

1993(平成5)年11月 『めいせい』1993年12月号

## 伊藤章博士の農村社会学 (1)

## — 『農村社会学講義案』を中心に—

1994(平成6)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第14号

## 1910年代アメリカ学校調査の検討 (1)

## — 「教育調査の歴史」論考：その4、教育調査成立史 (1) —

1994(平成6)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第30号

## 『生活世界を旅する — ライフコースと現代社会』(岩上真珠・石川雅信と共著)

1994(平成6)年10月 福村出版

## ライフコースと社会化、発達課題

1994(平成6)年10月 『めいせい』1994年11月号

## 『現代社会教育の課題』(神山敬章と共編著)

1995(平成7)年2月 明星大学出版部

## 伊藤章博士の農村社会学 (2)

## — 農村地域社会変動論を中心に—

1995(平成7)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第15号

## 1910年代アメリカ学校調査の検討 (2)

## — 「教育調査の歴史」論考：その5、教育調査成立史 (2) —

1995(平成7)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第31号

## 子どもの遊びと社会化

1995(平成7)年10月 『めいせい』1995年11月号

## 社会学の研究方法としての「社会調査」

## — 「社会調査法」基礎研究ノート (2) —

1996(平成8)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第16号

## 『桜井庄太郎児童史論集』(日本児童文化史叢書9、編集・解説)

1996(平成8)年4月 久山社

## 子どもの歴史の研究と教育社会学

1996(平成8)年11月 『めいせい』1996年12月号

## 生涯学習の中の社会教育

1997(平成9)年2月 『めいせい』1997年3月号

## アメリカ大統領社会傾向調査委員会『社会傾向調査』における教育調査

## — 「教育調査の歴史」論考：その6、教育調査成立史 (3) —

1997(平成9)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第33号

## 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究

1997(平成9)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第17号

## 『社会調査 — 社会学の科学的研究方法—』

1997(平成9)年4月 明星大学出版部

- 増田抱村『児童社会史』（日本〈子どもの歴史〉叢書4、解説）  
1997(平成9)年4月 久山社
- 現代社会の諸問題と社会教育 1997(平成9)年9月 『めいせい』1997年10月号  
『教育調査 —教育の科学的認識をめざして—』  
1998(平成10)年1月 明星大学出版部
- 桜井庄太郎博士の「日本青年史」研究  
1998(平成10)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第18号
- 銅直勇、桜井庄太郎 1998(平成10)年12月  
川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝 —書誌的考察』勁草書房刊、項目執筆
- 桜井庄太郎博士の教育社会学 1999(平成11)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第19号  
『人間の発達と社会 —教育社会学講義—』（住田正樹・藤井美保と共著）  
1999(平成11)年11月 福村出版
- 初期アメリカ学校調査の基本方針と成果（1）  
—「教育調査の歴史」論考：その7、教育調査成立史（4）—  
2000(平成12)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第36号
- 銅直勇教授の社会学（1）  
—『純正社会学概論』を中心に—  
2000(平成12)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第20号
- 初期アメリカ学校調査の基本方針と成果（2）  
—「教育調査の歴史」論考：その8、教育調査成立史（5）—  
2001(平成13)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第37号
- 銅直勇教授の社会学（2）  
—高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争を中心に—  
2001(平成13)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第21号
- 銅直勇教授の社会学（3）  
—「社会」概念の考察を中心に（前）—  
2002(平成14)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第22号  
『子どもの発達と現代社会 —教育社会学講義—』（住田正樹と共編著）  
2002(平成14)年10月 北樹出版
- 『社会教育の現代的課題』（神山敬章と共編著）  
2003(平成15)年2月 明星大学出版部
- 第二次世界大戦下における日本の子ども調査  
—1940年代日本における子ども調査の研究（1）—  
2003(平成15)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第39号
- 銅直勇教授の社会学（4）  
—「社会」概念の考察を中心に（後）—  
2003(平成15)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第23号

## 『社会調査 —社会学の科学的研究方法—』【改訂2版】

2004(平成16)年3月 明星大学出版部

## 学校評価・診断に基づく学校経営の改善

—地域社会との連携による「評価システム」「経営改善ストラテジー」の構築を中心に— (及川  
美美子と共著)

2004(平成16)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第40号

## 農家構成の変動過程と高齢者専業農家(第2報:1)

—大都市近郊農村地域社会の変動過程の研究(その5)—

2004(平成16)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第24号

## 『教育調査 —教育の科学的認識をめざして—』【改訂2版】

2004(平成16)年12月 明星大学出版部

## 『叢書 日本の児童遊戯』第25巻 編集・解説

2004(平成16)年12月 クレス出版

## 『総合演習 —教師の資質・能力の向上をめざして—』(佐々井利夫・及川美美子・味方修と共著)

2005(平成17)年1月 明星大学出版部

## 第二次世界大戦下における青少年の余暇生活調査

—1940年代日本における子ども調査の研究(2)—

2006(平成18)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第42号

## コミュニティ・スクール論の再検討

—「活動・体験」学習の意義を考える—

2006(平成18)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第26号

## 『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討(その1)

—教育調査史の視点から—

2007(平成19)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第27号

## 『地域教育の創造と展開 —地域教育社会学—』(岡崎友典・夏秋秀房と共著)

2008(平成20)年3月 放送大学教育振興会

## 第二次世界大戦開戦期における子どもの生活調査

—1940年代日本における子ども調査の研究(3)—

2008(平成20)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第44号

## 『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討(その2)

—「地域社会と学校教育」の視点から—

2008(平成20)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第28号

## 『生涯学習概論』(神山敬章と共編著)

2009(平成21)年1月 明星大学出版部

## 第二次世界大戦下における子どもの生活調査

—1940年代日本における子ども調査の研究(4)—

2010(平成22)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第46号

- 地域社会の学校支援  
2010(平成22)年5月  
住田正樹編『子どもと地域社会』(子ども社会シリーズ4.)学文社刊、所収  
『子どもの発達社会学—教育社会学入門—』(住田正樹と共編著)  
2011(平成23)年1月 北樹出版
- 明星大学開設初期における保健・体育教育  
2011(平成23)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第1号
- L.A.Cookのコミュニティ・スクール論  
—コミュニティ・スクール論の再検討(続)—  
2012(平成24)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第32号
- 星野鏡三郎の事跡(1)  
—星野鏡三郎の「履歴書」—  
2012(平成24)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第2号
- 常に「子ども問題」について問題意識を持ち続けよう  
—日本子ども社会学会におけるシンポジウムの歴史—  
2012(平成24)年5月 『中央評論』No.279
- 第二次世界大戦下における子どもの生活時間調査  
—1940年代日本における子ども調査の研究(5)—  
2013(平成25)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第49号
- 星野鏡三郎の事跡(2)  
—沢和哉「土木の神様—星野鏡三郎」—(解題)  
2013(平成25)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第3号  
『体験教育』第一号から(解題) 2013(平成25)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第3号
- 厚沢留次郎・児玉三夫共編著『農村中学校の教育と経営』(解題)  
2013(平成25)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第3号
- 地域社会における郷土教育の実践  
—『郷土教育より見たる川崎市教育』—  
2014(平成26)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第34号
- 星野鏡三郎の事跡(3)  
—星野鏡三郎の実兄星野錫の伝記『星野錫翁伝』から—(解題)  
2014(平成26)年3月  
『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第4号
- 熊本師範学校における郷土教育



—地域社会における郷土教育の実践（続）—

2015(平成27)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第35号

明星大学社会学科における研究成果刊行物（1）

—『明星大学社会学科研究報告』第1集～第12集—

2015(平成27)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第35号

明星大学開設初期における『研究紀要』（1）

—理工学部—

2015(平成27)年3月

『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第5号

『変動社会と子どもの発達 —教育社会学入門—』（住田正樹と共編著）

2015(平成27)年10月 北樹出版

明星大学社会学科創設期における社会学教育

2016(平成28)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第36号

明星大学開設初期における『研究紀要』（2）

—人文学部—

2016(平成28)年4月

『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第6号

戦後大学制度改革と大学基準協会

2017(平成29)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第53号

明星学苑海外日本人小学校の足跡

2017(平成29)年3月

『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第7号

師友回顧 —明星大学人文学部社会学科創設期の学生生活—

2017(平成29)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第37号

注：著書・論文名中『』を付したものは著書を表す。